

新刊紹介

天野絵里子

安江明夫 監修

日本図書館協会資料保存委員会編集企画

資料保存のための代替

日本図書館協会 2010.3
130p 21cm 定価1,890円(税込)
ISBN 978-4-8204-0922-9

本書は、資料保存のニーズに直面する図書館員やアーキビストが、マイクロ化やデジタル化といった資料の代替技術について概観でき、優れた実践にも触れられる、100頁ほどのハンディな1冊である。

私自身も現在大学図書館でデジタルアーカイブの運用に携わっているが、本書で繰り返し述べられたデジタルデータの長期保存に対する懸念は、目下の課題に直結するものであり、非常に参考になった。

最初の2章はいわば本書の縦糸と横糸をなしているといえよう。第1章では、本書の監修者でもある安江明夫氏によって、代替技術の発展史が概括されている。第2章では、竹内秀樹氏が、内外のガイドラインを引きながら、代表的な代替技術であるマイクロ化、電子式複写、デジタル化のそれぞれの長所と短所をまとめている。

第3章では新井浩文氏が、アンケート結果をもとに、日本のアーカイブズにおける資料の代替化の現状と問題点を明らかにしながら、アーカイブズ資料の特徴をふまえた代替化技術について述べている。ボーン・デジタルの公文書の保存については喫緊の課題であるだけに、最後に詳しく説明されている。公文書管理の実務家はぜひ参照されたい。第6章では植林幸一氏により、デジタルとアナログ(マイクロフィルム)の利点を合わせ持つ、リファレンス・アーカイブ・システムについての詳しい紹介がある。

それぞれの筆者が、直面する資料の代替ニーズに対し、どのような点を考えてよりよい選択を導き出せばよいかのポイントを示しており、事例報告にあてられた残り2章と合わせれば、読者が実際に資料のプリザベーション、代替化に携わる際の選択と意思決定に関し、多くの示唆を得られるだろう。

私は学術情報リポジトリの運営にも携わっているが、同じリポジトリでありながら本学ではおこなっていない、貴重資料のデジタル画像の公開に用いた

琉球大学の事例は興味深い(第4章)。19世紀に那覇で布教活動をおこなった宣教師ベッテルハイムの日記や書簡といった原資料を修復し、マイクロ撮影、さらにデジタル化した画像をリポジトリに登録している。当時このプロジェクトに関わった高橋輝氏は、メタデータの重要性とともに、貴重な資料を十分に知り、このような計画を推進できる人材開発の重要性についても触れている。

東京大学経済学部資料室の資料保存の実践については、第5章の執筆者でもある小島裕之氏による報告がすでに多くあるが、本書では、いくつかの資料群に対する代替化の事例を、その方法をなぜ選択したのかという、きわめて経営的な意思決定プロセスという観点からまとめ直されている。たとえば古貨幣・古札コレクションに対しては、カラーマイクロフィルム化(後にデジタル化)を選択することとなったが、素材として決してベストなものではないにせよ、コストと資料の活かし方を考慮した結果であるといった、判断の過程が詳述されている。コレクション単位ではなく単体で劣化の進んだ資料は、デジタル化と複製本作成という代替化で対処しており、章末にまとめられたいくつかの「根底にある考え方」のうち、「複数フォーマットによる二重保存」の原則が貫かれていることなどがよくわかる。

おそらくは、小島氏が述べるように、「モノはいくつか必ず壊れるというごく単純な事実からすれば、1つの媒体や記録方法に固執するのは、資料保存をマネジメントする立場の人間にふさわしくない」であろう。さらにいえば、様々な資料群や1点1点の資料にとって、その場その時に保存のために費やすことのできる予算や時間、人材といった資源は限られており、その他様々な条件を考慮しても、この資料にはこの代替化手法が絶対に正しいという正解はなく、あるのは苦渋の決断だけかもしれない。

保存と利用の両立は永遠の課題であるが、それに直面する人は本書の論考だけで多くの実務的な知識が得られるであろうし、付録の文献案内からはより広く多様な情報へアクセスできる。デジタルか紙か、あるいはマイクロフィルムか。有用な比較調査報告は次々に世界中で発表されており、最新の情報は(株)資料保存器材のニュース「ほぼ日刊資料保存」(<http://www.hozon.co.jp/hobo/>)にも詳しい。本書に加えそれらの情報にもあたり、実務の参考としたい。

(あまの えりこ 京都大学附属図書館)